

# 妙高山と岡倉天心

---

於：如水会館

SSKK染井昭和健康会

日時：2020年12月9日（水）

日本学術会議協力研究団体

アジア文化造形学会 会長

山本 悦夫

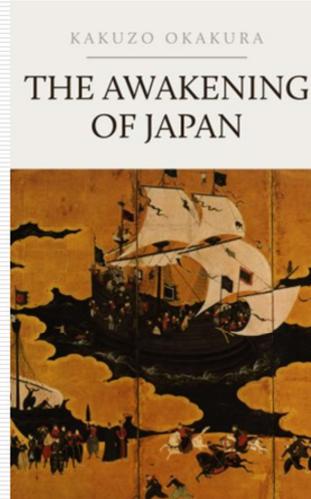
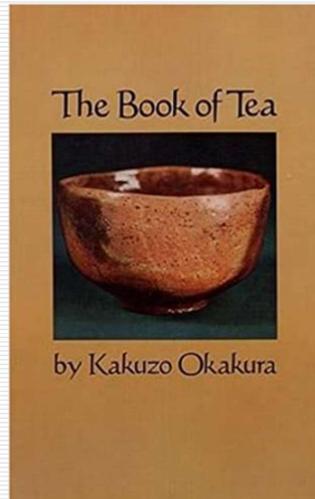
---

1

この場所に近いところに事務所がある環太平洋アジア交流協会の理事会で、門田さんから依頼されてやって参りました。健康会という会ですので、多分私が**90**歳に近い老齡であることを認められて声を掛けられたのではないかと思います。考えてみますとお釈迦様が亡くなったのが**80**歳、お釈迦様より**6**年も長く生きているのですから、大したものです。

さて、岡倉天心ですが、皆さまご存じの通り『お茶の本』を書いた偉い方です。

## 『茶の本』と『日本の覚醒』



2

岡倉天心は今の東京芸術学校の設立に大きく貢献し、日本美術院を創設した方です。日本美術院は、院展として今でも権威のある団体です。近代日本における美術史の開拓者であり、海外に日本文化を発信し続けました。

しかし、残念なことには51歳という若さで亡くなりました。私らと同じくらい生きていたら、どれくらい大きなことをないどげたか、想像すると残念でなりません。

天心は、生まれたのは横浜でしたが、亡くなったのは妙高高原の赤倉温泉でした。お墓は巣鴨に近い染井霊園(染井健康会と同じ染井ですね)、その染井墓地にあります。亡くなったのは赤倉温泉。普通には赤倉温泉が湯治場だから療養に行って亡くなったと言われています。私はそんな単純なものではないと思っています。そのことを今日はお話したいと思います。

Kakuzo Okakura, who was known in America as a scholar, art critic, and Curator of Chinese and Japanese Art at the Boston Museum of Fine Arts, directed almost his entire adult life toward the preservation and reawakening of the Japanese national heritage — in art, ethics, social customs, and other areas of life — in the face of the Westernizing influences that were revolutionizing Japan around the turn of the century.

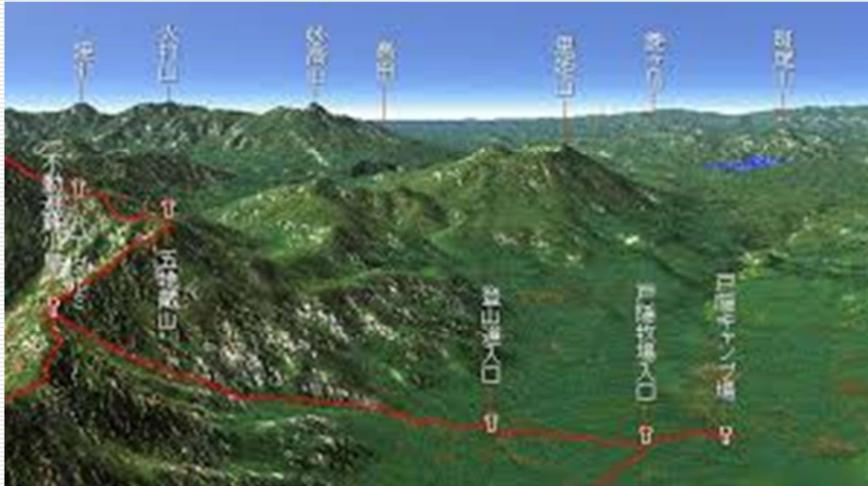
This modern classic is essentially an apology for Eastern traditions and feelings to the Western world — not in passionate, oversentimental terms, but with a charm and underlying toughness which clearly indicate some of the enduring differences between the Eastern and Western mind. Okakura exhibits the distinctive "personality" of the East through the philosophy of Teism and the ancient Japanese tea ceremony. This ceremony is particularly revelatory of a conservative strain in Japanese culture; its ideals

of aesthetic tranquility and submission to the ways of the past find no parallel in the major cultural motifs of the West.

Not only does he discuss the tea ceremony and its rigid formalities, and the cult and patterns of belief surrounding tea and tea-drinking, but Okakura also considers religious influences, origins, and history, and goes into the importance of flowers and floral arrangements in Japanese life — their proper appreciation and cultivation, great tea-masters of the past, the tea-room with its air of serenity and purity, and the aesthetic and quasi-religious values pervading all these activities and attitudes.

Okakura's English style was graceful, yet exceptionally clear and precise, and this book is one of the most delightful essay-volumes to the English language. It has introduced hundreds of thousands of American readers to Japanese thinking and traditions. This new, corrected edition, complete with an illuminating preliminary essay on Okakura's life and work, will provide an engrossing account for anyone interested in the current and central themes of Oriental life.

## 妙高戸隠連山国立公園



3

岡倉天心が亡くなったのは、妙高山を見張らせる赤倉温泉の天心の別荘でした。それでは、妙高山にはどういう意味があるのでしょうか。妙高山は、分解すると妙なる高い山という意味になります。実はこれはインド神話におけるメール山の意識なのです。音にすると須弥山とまります。シュミセン→スメール山となります。

アジアにおいて早くまとまりのある世界像を構想したのはインド人で、バラモン教の説くところによれば、世界の中央に(ジャンプトゥビーパ)閻浮提、贍部洲(せんぶしゅう)と呼ばれる円形の大陸があり、その中心にそびえる巨大なメール山がそびえ立つというイメージです。

その上空を回る太陽の光を遮って地上に昼夜をつくり、この山の南北にはそれぞれ三すじの山脈があつて、最南の山脈がヒマラヤ(雪の蔵)だとされている。インド(バーラタバルシャ)は当然ヒマラヤ山脈の南方ということになるが、南に弧をもつ弦月形の部分をインドとするのは、デカン半島の輪郭を知っていたからであろう。...

ギリシア神話では、ギリシアの高峰オリュポス山の頂上が神々の住む天上界とみなされているが、このように高山の頂上を神々の住处(すみか)とする観念は、多くの神話に共通してみられる。古代インドの神話でも、大地の臍に当たる世界の中心に神山メールがそびえ、その頂上にインドラが王として支配する天国スワルガがあつて、神々と神霊たちがそこに都市を造って住んでいるとされており、この信仰は、須弥山(しゆみせん)の頂上にある帝釈天(たいしやくてん)を王とする三十三天の住处の(切利天(とうりてん))として、仏典に取り入れられている。古代中国における崑崙山も同様でのちにこの

山は西王母(せいおうぼ)の住処とみなされるようになった。...

妙高山2、454メートル

火打山

戸隠山

雨飾山

高妻山

飯尾山

## 戸隠忍法(戸隠民俗館蔵)



4

妙高の長野県側には、戸隠があります。戸隠は天狗の山里です。これは、戸隠民俗館に展示されている忍術絵巻の絵です。鳥のように羽がついていて、鼻が天狗の鼻のように高い鼻ですね。これは、義経が鞍馬さんで修行していた時に烏天狗から武芸を学んだという話を思い出させます。

## 迦楼羅(戸隠民俗館蔵)



5

やはり、戸隠の民俗館に陳列されている迦楼羅の像です。明らかに三十三間堂の迦楼羅を真似ています。

## 興福寺の迦楼羅

迦楼羅



阿修羅



左側は、私が、インドで出版したガルダの本に使わせてもらった興福寺の迦楼羅像です。興福寺の天竜八部衆の仲間の迦楼羅の横にはあの有名なミスター奈良とも言われる美男の阿修羅像が並んでいます。ガルダや阿修羅などは天竜八部衆として仏教に取り入れられています。何故こういう話をするかというと、最も高い妙高山を中心とする妙高戸隠連山は大変宗教的な雰囲気包まれたスポットだということを感じていただきたかったからなのです。

## 妙高山

---

### メール山

スメール山(スは美麗の接頭語)

須弥山(スメールの音読み)

妙高山(スメールの訓読み)

妙＝ス

---

7

くどいようですが、もう一度メール山と妙高山の関係を説明いたします。

アジアにおいて早くまとまりのある世界像を構想したのはインド人で、バラモン教の説くところによれば、世界の中央にジャンプトゥビーパ(贍部洲(せんぶしゅう))と呼ばれる円形の大陸があり、その中心にそびえる巨大なメール山は、その上空を回る太陽の光を遮って地上に昼夜をつくり、この山の南北にはそれぞれ3条の東西方向の山脈があって、最南の山脈がヒマラヤ(雪の蔵)だとされている。インド(バーラタバルシャ)は当然ヒマラヤ山脈の南方ということになるが、南に弧をもつ弦月形の部分をインドとするのは、デカン半島の輪郭を知っていたからであろう。...

### 【山】より

...[森](#)【谷口 幸男】

### 【山をめぐる神話】

ギリシア神話では、ギリシアーの高峰オリュンポス山の頂上が神々の住む天上界とみなされているが、このように高山の頂上を神々の住処(すみか)とする観念は、多くの神話に共通してみられる。古代インドの神話でも、大地の臍に当たる世界の中心に神山メールがそびえ、その頂上にインドラが王として支配する天国スワルガがあって、神々と神霊たちがそこに都市を造って住んでいるとされており、この信仰は、須弥山(しゆみせん)の頂上にある帝釈天(たいしやくてん)を王とする三十三天の住処の〈切利天(とうりてん)〉として、仏典に取り入れられている。古代中国における崑崙山も同様でのちにこの山は西王母(せいおうぼ)の住処とみなされるようになった。...

# スメル山(マハメル山)

## □ Gunung Semeru



8

インドネシアのジャワ島には、スメル山 (スメルさん、**Gunung Semeru**) と呼ぶ高山があります。ジャワ島の**最高峰**であり、標高は **3,676m**。世界でも最も活動している**火山**の**1つ**ですが、登山者も多く、ここも宗教的雰囲気がある山であり、周囲には多くの古い寺院があります。これも日本語に訳すと妙高山になります。

### 概要[編集]

ジャワ島の東側の海岸平野に忽然とそびえる急峻な山で、山頂の**火口**には**火口湖**がある。テンゲル火山群の南端にある。山名は古代インドにおいて世界の中心にそびえる聖山とされていたスメール山(**須弥山**)に由来する。

山頂火口での頻発する小規模なブルカノ式噴火でよく知られている**山**。スメル山の噴火歴は多く、**1818年**以降少なくとも**55回**の噴火が記録されており、そのうち**10回**の噴火では犠牲者が出ている。**溶岩流**や**火砕流**が記録されている。やや規則的に中規模の噴火を繰り返す。**1967年**以降は定常的に噴火を繰り返し、**10分**おきぐらいに小爆発を繰り返している。

この山には常に登山者が登っており、北側にあるRanoPani村から登ることが多い。しかし、**火山ガス**吸引による犠牲者も出ている。

## ヒマヤラ山脈



9

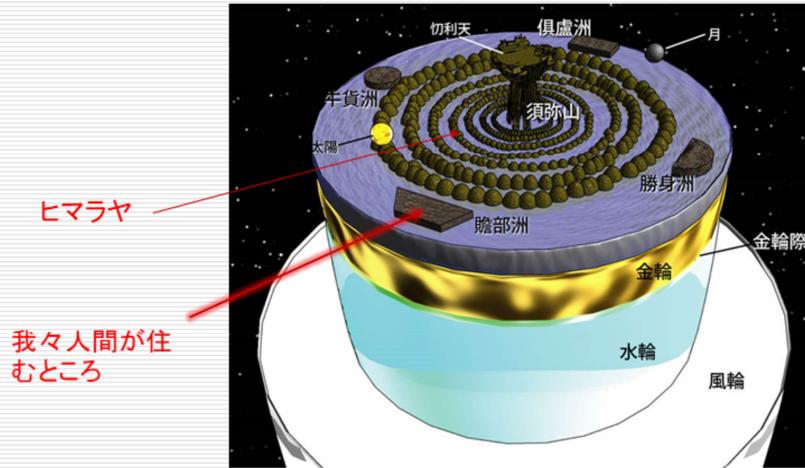
ヒマヤラは雪山と呼び、雪山を妙高山と同一化する考え方をする方もあります。しかし、バラモン教の地図によると、ヒマラヤの先に無熱脳池があり、その先にカイラーサ山があります。そこには、ヒンズー教のシバ神(日本仏教では不動明王)が鎮座しています。ヒンズー教やチベット仏教では、そこをスメール山と考えているようです。実際のカイラーサ山は、チベットに実在します。近くにあるマナサロワール湖を無熱脳地と考える考え方もあります。

### ヒマヴァット

Himav

インド神話においてヒマラヤ山脈を神格化した存在。名前は「霜の降りた」といった意味。別名である「パルヴァテーシュヴァラ(Parvateśvara="山々の主")」に示される通り山の主宰神であり、女神メーナーとともにパルヴァティ、ガンガーの親とされる。

## 須弥山のイメージ(ウィキペディアより)



10

図にすると須弥山のイメージはこのようになります。この三角形の陸地が我々が住むセンプシュウです。

### 須弥山】より

...金輪の上に大海があり、その中央にそびえたつのが須弥山である。須弥山は七つの同心状の山脈に囲まれ、七つ目の山脈の外側の東西南北方向にそれぞれ勝身(しょうしん)洲、瞻部(せんぶ)洲(閻浮提(えんぶだい)), 牛貨(ごけ)洲、俱盧(くる)洲がある。南の瞻部洲はインド亜大陸の形を反映しているが、これが〈われわれの〉住む大陸とされる。...

## 須弥山儀



11

江戸時代の末期西洋の地動説が広まることにより仏教の權威が失われることを恐れた天台宗の僧円通が、インド起源の仏教の天動説である須弥山宇宙説を目に見える形で広めるために考案したのがこの「須弥山儀」です。円通の弟子が田中久重に製作を依頼したものです。これを見ると、私たちが住むセンプシュウが三角形でよく表されています。

そのうちの一つは、熊本市「時計の大橋」が所有し、セイコーミュージアムに寄託され常設展示されている。

弘化4年(1850年)田中久重が制作したからくり時計です。

私たちが住む世界は、いったいどのような姿をしているのでしょうか？

アジア各地には、古代文明の誕生と共に現れた宇宙観に共通する一つのイメージがありました。世界の中心とは何でしょうか？それは宇宙軸を感知する場所。つまり体に例えれば体の真ん中の臍であり、宇宙で言えば大地の中心の臍であり、その場所に宇宙山が聳え立ち、天と地と地下の冥界を垂直に結びつけているのです。この宇宙観は、古代バビロニア、今のイラクあたりで出来上がりました。そしてこの宇宙観がインドに伝わりアジア各地へと伝わっていったのです。日本には、シルクロードを通過してやってきました。インドで古代神話あるいはヴェーダに取り入れられ、仏教にも受け継がれ仏典と共に中国、朝鮮、日本などにも伝わって来たのです。別の道では、ベトナムやタイやカンボジアやジャワやバリ島インドネシアなどにも伝わりました。

この宇宙観において、宇宙の中心に聳える山がスメール山と名付けられました。このスメールという名が須弥山と音訳され、妙高山と意訳されたのです。(スメールのスは、聖なるという意の接頭語です。したがって妙高山は聖なる高山という意味になります)おおよその日本人は、こういう理屈には気づいていないと思いますが、私たち日本人の精神構造に組み入れられているのは間違いありません。神社のお祭りにもその理が姿を現しております。私たちはこういう世界に住んでいるのです。

真ん中にたっているのがスメール山、音訳で須弥山、つまり妙高山です。

岡倉天心は、インドとの交流によって以上の理を確信し、それ故に妙高山を仰ぎ見る赤倉に日本美術院を置き、東洋精神、東洋文化の発信地としたいという思いを強くしたのです。私たちは岡倉天心の思いを継承して、天心最後の地である赤倉に拠点を置き、「アジアは一つ」という天心の信念を実現すべ努力したい。この思いは必ず実現できるものと確信します。それをお伝えしたかったのでこういうスライドを作りました。短時間で作り上げましたので分かりにくいとは思いますが、どうか辛抱してお聞き頂きたいとお願い申し上げます。

須弥山の須弥とは梵字「Sumeru」（スメール）の音写で妙高と訳される。古代インドの宇宙観で、一須弥世界の中心にある高山を指す。仏教ではこの須弥山説を踏襲しており、江戸末期にはこれを一般に易しく理解させるため、リンが鳴り太陽と月が時計仕掛けで動く模型を考案した。これが「須弥山儀」である。嘉永3年（1850年）製作。西洋の天動説が広がるにつれ誰よりも危惧したのが仏教界だった。

須弥山の下にある三角形がセンプ州。

仏教宇宙観は「俱舎ぐしゃ論」（5世紀頃、世親作）に詳しく、それによると宇宙空間（虚空）には巨大な風輪が浮かんでおり、その上に水輪が、さらにその上には金輪こんりんが浮かんでいる。水輪と金輪の境目は「金輪際」と称され、金輪上には海水が満ちてあり、最外周は海水が流出しないように鉄でできた鉄困山

てっちせんで困まれている。金輪の中央には金・銀・瑠璃・玻璃の四宝でできた須弥山がそびえ立っており、その高さは海拔8万ヨージャナ（1ヨージャナは約7Km）。その周辺を九山八海くせんはっかいが交互に存在し、八海には八功德水はっこうどくすいが満ちている。海中の四方にはそれぞれ東勝身洲とうしゅうしんしゅう、南瞻部洲なんせんぶしゅう、西牛貨洲さいごけしゅう、北俱盧洲ほっくるしゅうの4島があり、我々人間は南方の瞻部洲に住んでいる。ただし、この地下には恐ろしい八大地獄が待ち構えているという。この瞻部洲のみを模型にしたものが「縮象儀しゅくしょうぎ」であり、本学大宮図書館に一基のみ存在する。

江戸末期、西洋の地動説が広まることにより、仏教の権威が失われることを誰よりも危惧したのは仏教界であった。殊に天台宗の普門律師円通は『佛國歴象編』などを著し、仏教界の危機意識はあまりにも低いと憤慨し、仏法護持の信念を述べている。円通の揺ぎない梵曆普及の精神は、彼の高弟である天竜寺の環中禅機、その孫弟子である萩の永照寺俱舎晃徹らによって引き継がれた。

環中らの高弟は嵯峨林泉寺に所蔵されていた円通の掛け軸をみて、師匠の信念を受け継ぎ、これを是非とも実際に動く模型にしたいと願望した。そこで弘化年間の当時、からくり細工人としては本邦随一の名声を博していた「からくり儀右衛門」こと田中久重（東芝創立者）に製作を依頼したのである。弘化四年着工し、嘉永三年見事これを完成した。

こうして円通による梵曆普及の精神は環中によって引き継がれ、環中が発注製作した「須弥山儀」と「縮象儀」は晃徹が引き継ぎ所有した。その後これを晃徹の次男である村上孝雄師が譲り受けられ、西本願寺の大学林（現龍谷大学）に寄贈された。「六條学報」第76号には村上孝雄師の寄贈書目として「須弥山儀器械」、「縮象儀器械」が他の関係資料と共に掲げられてある。

（文・青木正範 大宮図書館司書）

# ボロブドール

---



---

12

須弥山のイメージをいくつかお見せしましたが、これを地上に作り上げたのがインドネシア、ジョクジャカルタのボロブドールの仏跡です。

## ミャンマーのバガンの仏塔

---



---

13

ミャンマーのバガンの仏塔です。この仏塔一つ一つが須弥山を表しております。バガンの仏教遺跡は、さきほどお見せしましたインドネシアのボロブドール、さらにカンボジアのアンコールワットと共に世界の三大仏教遺跡と言われています。何故か大規模な仏教遺跡は東南アジア諸国に固まっています。

## 法隆寺の五重塔

---

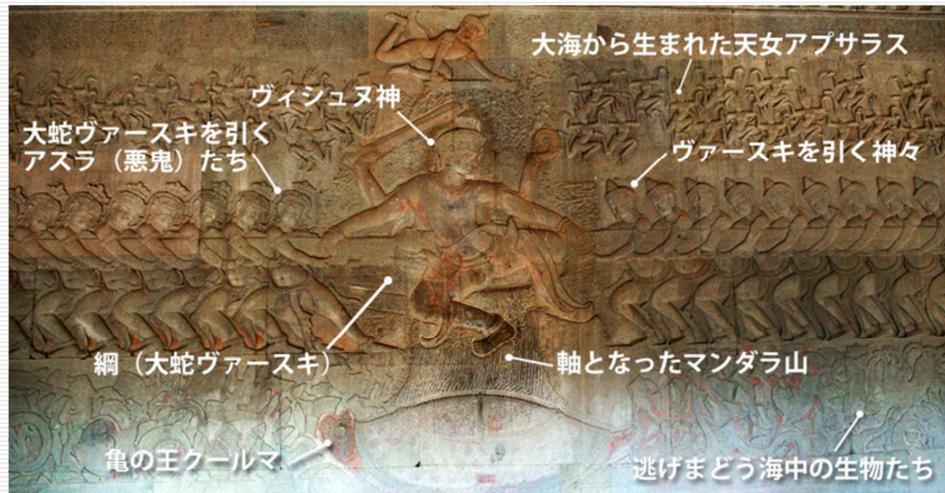


---

14

世界最古の木造建築と言われている法隆寺の「五重塔」です。仏塔は、すべてスメール山(須弥山)をイメージしたものと言ってよいでしょう。

## 乳海攪拌(アンコールワット壁浮彫)



15

カンボジアのアンコールワット仏教寺院の西側回廊の壁の浮彫です。

曼荼羅山(スメール山)を軸にして神様と悪魔が綱を引き乳海をかき混ぜて不老長寿の薬アマリタ(甘露)を作ろうとします。この際にいろいろな生き物が生まれるという天地創造の神話です。ここでもスメール山が世界に中心に据えられています。

# ヒンズー教の天地創造神話

アンコールワットの浮彫



16

この図だとともっと分かりやすいかもしれません。左側がアンコールワットの浮彫、右側がインドの天地創造の絵です。興福寺の阿修羅は可愛く作られています。もともと阿修羅は悪鬼でした。ヴィシュヌ神が座っているのが曼荼羅山すなわち須弥山です。

## 岡倉天心

1863年2月14日(文久2年12月26日) - 1913年(大正2年)9月2日



17

それでは、いよいよ岡倉天心と妙高山とのかかわりをお話いたします。これは、晩年の天心の写真です。

文部官僚として明治期の日本の美術行政を主導し、後に拠点をアメリカに移してからは、広く欧米世界に向けて伝統東洋文明のあり方を説くことに注力した岡倉天心(おかくら・てんしん)。著作『茶の本』に見る力強い筆致や、ぶれることのない確固とした持論からは英雄的な人物像が浮かぶが、ある女性に宛てた手紙には、誰にも見せたことのない天心の姿が投影されていた。東京女子大学教授の大久保喬樹(おおくぼ・たかき)氏が天心の知られざる晩年を語る。

\* \* \*

1912年、天心は最後のボストン勤務となるアメリカ行きのため、横浜を出港して経由地のインドに向かいました。上海、香港、シンガポールを経て、9月中旬にカルカッタ(現在のコルカタ)に到着すると、天心は詩人ラビンドナラート・タゴールの甥で旧知のスレンドラナート・タゴールに迎えられ、その家の客となります。そこで出会ったのが、プリヤンバダ・デーヴィー・バネルジー夫人。天心が生涯最後の運命的な恋におちた女性です。

バネルジー夫人は、天心より9歳年下でこのとき41歳。ベンガル地方の名家出身で、タゴールの遠縁にあたる未亡人でした。また、彼女は生涯に五冊の詩集を出した詩人でもありました。このときの天心のインド滞在は一か月弱の短いもので、ゆっくりふたりきり

の時間をもつようなことは難しかったと思われます。しかし、天心がインドを離れたあと、ふたりは文通を通じて急速に接近していったのです。

この、天心とバネルジー夫人が交わした手紙のやりとりは、長らく埋もれて知られていませんでしたが、第二次世界大戦後、まずインドにおいて、バネルジー夫人の遺品中に天心からの来信19通が、ついで、日本において、天心の弟由三郎の手元に保管されていた夫人から天心あての来信13通が、それぞれ発見され、大きな反響を呼び起こしました。というのも、そこには、夫人に対し赤裸々に自分の弱さをさらけ出す、天心の知られざる姿があったからです。年齢ではすでに50歳に達しようとし、これまで英雄的といつてよいような行動力、指導力でさまざまな事業を成し遂げ、人々を率いてきた天心が、そこでは手放して泣き叫び、愛と保護を求めてもだえていたのです。

天心が、このように手紙の中で自分の気持ちを吐露(とろ)した背景には、そのころ急速に悪化しつつあった自身の健康状態の影響もあったと思われます。ボストンでの勤務を続けることが難しくなった天心は、帰国を決意し、1913年4月に日本に到着すると、五浦での療養生活に入りました。そして、六角堂から眼前に広がる太平洋を眺めながら、バネルジー夫人に手紙を書き送るのです。日本に戻ってから最初の便りでは、次のように自分の様子を伝えています。

私は、海辺に座って、一日中、海が逆巻き、波立つのを眺めています。いつか海霧の中からあなたが立ちあらわれてこないかと思いながら。いつか、あなたは、もっと東の方においでになりませんか——中国へ——マレー海峡へ——ビルマへ。ラングーンなどカルカッタから石を放り投げるほどの距離にすぎないではありませんか。空しい、空しい夢！でも、なんと甘美な夢か。

こうした海への思いは、五浦に戻ってからの天心の手紙にはくりかえしあらわれるものです。天心は、小船に乗った自分を港(バネルジー夫人)にたどり着かせてくれる風が吹かないものかと願う詩を書いたり、ふたりの精霊が太平洋の真ん中で出会う様を夢想する手紙を書いたりもしています。五浦で太平洋の大海原を前にして、天心は、この海こそが、国境とか国際情勢とかの人為的な障壁を越えて直接的な精神の交流を可能にし、まさにアジアの一体性を実現する自然の場であることを実感したのでしょう。五浦は決してアクセスのよい場所ではありませんが、実際に行ってみると、東京などにいるよりもむしろ、インドやアメリカとダイレクトにコミュニケーションできるという彼が得た感覚を、いまでも追体験することができます。

1913年8月、いよいよ天心に最期の時が近づいてきました。そのとき五浦から天心が送った手紙には、「くりかえし、くりかえしペンをとりあげましたが、驚くことに、何も書くべきことがありません」という一行に始まる、死に直面して呆然としているような思いがつつられています。その十数日後、天心は家族に付き添われて新潟県赤倉の山荘に移ります。そして、その病床から最後の手紙をバネルジー夫人に書き送りました。ここで初めて、天心はそれまで隠してきた病状を率直に打ち明けたうえで、死を受け入れた自分のいまの思いを次のように記すのです。

これまであんなに頑健だった私が、やっと、生きることの喜びを味わい始めたその時に、

こうして病に倒れねばならないというのは、なんと奇妙なめぐりあわせでしょう。きっと、若い時に、野蛮な無茶ばかりしてきた罰があたったのでしょう。しかし、私は宇宙と全くうまくやっており、宇宙からこの頃与えられるものに対して感謝、そう、大変感謝しています。

私は本当に満足しており、暴れだしたいくらい幸せです。この部屋まで入り込んできて、枕のまわりで渦巻いている雲に向かって笑いかけるほどです。

8月24日、天心は腎臓病に心臓病を併発、29日、さらに尿毒症をも発して重体に陥ります。急をきいて東京から弟由三郎、弟子の横山大観、下村観山らが駆けつけましたが、そのまま、9月2日早朝、天心は五十年の生涯を閉じました。翌日、家族や弟子たちに護られて東京に戻る遺骸をおさめた棺は、最後は花こそが私たちとともにあるとした天心の言葉をなぞるように、赤倉の山に咲き乱れる秋の野花で覆われていたと言います。

## 五浦

---



---

18

東京美術学校(現、東京藝術大学)の校長であった天心はこの5年前に職を辞し弟子たちとともに日本美術院を創設、新しい時代の日本画を創り出そうとしていました。そんな中、五浦という土地を見つけ、弟子の横山大観、下村観山、菱田春草、木村武山を呼び寄せました。天心は、陽光輝く茨木県の五浦に画家を集めて日本のバルビゾンとして、そこに別荘を作りアメリカとの往復の生活を長く続けました。

天心は地元茨城出身の画家、飛田周山の案内でいわき市から五浦まで、海岸の別荘を探し歩いていましたが、ここ五浦の景色が気に入り、明治36年5月土地を購入しました。東京美術学校(現、東京藝術大学)の校長であった天心はこの5年前に職を辞し弟子たちとともに日本美術院を創設、新しい時代の日本画を創り出そうとしていました。そんな中、五浦という土地を見つけ、弟子の横山大観、下村観山、菱田春草、木村武山を呼び寄せることになるのです。

# バルビゾン

---



---

19

バルビゾン (**Barbizon**) は、[フランスのイル＝ド＝フランス地域](#)。[フォンテーヌブロー](#)の森に隣接しています。19世紀には[ジャン＝フランソワ・ミレー](#)に代表される風景画家たちが集まり、[バルビゾン派](#)と称された。このため、小さな村ではあるが、世界中から観光客が訪れており、村は「**画家たちの村バルビゾン(Barbizon Village de Peintres)**」と名乗っている。

バルビゾン派(バルビゾンは、*École de Barbizon*)は、1830年から1870年頃にかけて、[フランス](#)で発生した[絵画](#)の一派である。フランスの[バルビゾン](#)村やその周辺に[画家](#)が滞在や居住し、[自然主義](#)的な[風景画](#)や[農民画](#)を写實的に描いた。**1830年派**とも呼ばれる。

主な画家[\[編集\]](#)

[コロ](#)、[ミレー](#)、[テオドール・ルソー](#)、[トロワイヨン](#)、[ディアズ](#)、[デュプレ](#)、[ドービニー](#)の7人が中心的存在で、「バルビゾンの七星」と呼ばれている。広義にはバルビゾンを訪れたことのあるあらゆる画家を含めてそのように呼ぶこともあり、総勢100人以上に及ぶ。

なお、[写実主義](#)の画家と位置づけられる[クールベ](#)はバルビゾン派には含まれていないが、同派と交流し[フォンテーヌブロー](#)を描いた作品もあることから、関連する重要な画家と位置付けられている。

## スライド 19

---

ye1 yamamoto etsuo, 2020/12/09

## 晩鐘

---



---

20

「晩鐘」(ばんしょう)は、[フランス](#)の画家[ジャン=フランソワ・ミレー](#)が[1857年-1859年](#)に制作した油彩画。

バルビゾン派の中心として絵を描いてきました。ミレーは、本作品制作当時、[パリ](#)を離れて[バルビゾン](#)の村で生活し、主に[サロン・ド・パリ](#)に向けて農民画などを描いていました

。

# インドとの交流

タゴール



ヴィーヴェーカーナンダ



21

岡倉天心は、タゴール、ヴィーベカーナンダと深く交流いたしておりました。

タゴールは、アジア人として初めてノーベル文学賞を受賞したほか、 Bangladesh 国歌を作詞・作曲。アジアを代表する“詩聖”として知られている。

1901年にインドに渡った岡倉天心がタゴールと出会ったことを機に、芸術や思想について議論しながら交流を重ねていった。

スワミ・ヴィヴェーカーナンダ (**Swami Vivekananda**) は、タゴールとの縁でインドで知り合ったようです。

日本では、意外に知られていませんが、海外では大変有名な人です。

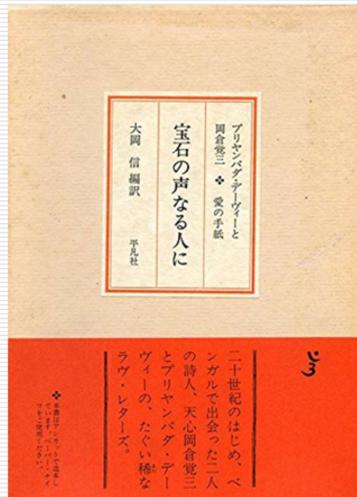
彼は、ヒンドゥー教の改革運動、インド内での社会奉仕活動、インド外への布教に尽力し、植民地時代のインドで人々に民族的自覚を促してインドのナショナリズムの高揚を後押しし、インド及び欧米諸国の人々に影響を及ぼしました。インドの国民的英雄と評されており、彼の誕生日の1月12日は、インドではその業績を若者に生かすべく、若者のための全国青年日 (ナショナル・ユース・デー)として祝日になっています。

そういう意味では日本の宗教を海外に広めた天心と似ているように思えます。

hat-tha) 1863年1月12日 - 1902年7月4日) は、インドのヒンドゥー教の出家者、ヨーガ指導者、社会活動家。ラーマクリシュナの弟子・後継者であり、ラーマクリシュナ僧院とラ

一マクリシュナ・ミッションの創設者である。

## 天心最後の恋



22

天心の最後の恋人ブリヤンダバダ デーヴィーとの愛の手紙を読むと天心がいかにインドに傾倒していたか、よくわかります。そして、それによって天心が何ゆえに赤倉に日本美術院を置きたかったのかという気持ちがくみ取れます。それは妙高が宇宙の中心であることをインドの哲学者や詩人と交流したり、仏典を読んだりして心に止めておいたからです。1913年8月21日(大正2年)天心は恋人ブルヤンバダに最後のラブレターを書きました。このラブレターを書いた10日後、9月2日に天心はなくなりました。これが天心の絶筆となりました。

『宝石の声なる人』の天心の最後の手紙を松木マリアさんに朗読していただきます。

伝統東洋文明のあり方を説くことに注力した岡倉天心(おかくら・てんしん)。著作『茶の本』に見る力強い筆致や、ぶれることのない確固とした持論からは英雄的な人物像が浮かぶが、ある女性に宛てた手紙には、誰にも見せたことのない天心の姿が投影されていた。東京女子大学教授の大久保喬樹(おおくぼ・たかき)氏が天心の知られざる晩年を語る。

\* \* \*

明治21年)、明治を代表する文部官僚で男爵の九鬼隆一は岡倉のパトロンであったが、その妊娠中の妻波津子と恋に落ちる。波津子は隆一と別居し、のち離縁する。離縁後に生まれた子が、有名な哲学者九鬼周造である。彼は、子供の頃訪ねてくる天心を父親と考えたこともあったと記している。10月、博物館学芸員に任命され、年間300円の手当を得る<sup>5</sup>。

1912年、天心は最後のボストン勤務となるアメリカ行きのため、横浜を出港して経由地のインドに向かいました。上海、香港、シンガポールを経て、9月中旬にカルカッタ(現在のコルカタ)に到着すると、天心は詩人ラビンドナラト・タゴールの甥で旧知のスレンドラナート・タゴールに迎えられ、その家の客となります。そこで出会ったのが、プリヤンバダ・デーヴィー・バネルジー夫人。天心が生涯最後の運命的な恋におちた女性です。

バネルジー夫人は、天心より9歳年下でこのとき41歳。ベンガル地方の名家出身で、タゴールの遠縁にあたる未亡人でした。また、彼女は生涯に五冊の詩集を出した詩人でもありました。このときの天心のインド滞在は一か月弱の短いもので、ゆっくりふたりきりの時間をもつようなことは難しかったと思われます。しかし、天心がインドを離れたあと、ふたりは文通を通じて急速に接近していったのです。

この、天心とバネルジー夫人が交わした手紙のやりとりは、長らく埋もれて知られていませんでしたが、第二次世界大戦後、まずインドにおいて、バネルジー夫人の遺品中に天心からの来信19通が、ついで、日本において、天心の弟由三郎の手元に保管されていた夫人から天心あての来信13通が、それぞれ発見され、大きな反響を呼び起こしました。というのも、そこには、夫人に対し赤裸々に自分の弱さをさらけ出す、天心の知られざる姿があったからです。年齢ではすでに50歳に達しようとし、これまで英雄的といつてよいような行動力、指導力でさまざまな事業を成し遂げ、人々を率いてきた天心が、そこでは手放しで泣き叫び、愛と保護を求めてもだえていたのです。

天心が、このように手紙の中で自分の気持ちを吐露(とろ)した背景には、そのころ急速に悪化しつつあった自身の健康状態の影響もあったと思われます。ボストンでの勤務を続けることが難しくなった天心は、帰国を決意し、1913年4月に日本に到着すると、五浦での療養生活に入りました。そして、六角堂から眼前に広がる太平洋を眺めながら、バネルジー夫人に手紙を書き送るのです。日本に戻ってから最初の便りでは、次のように自分の様子を伝えています。

私は、海辺に座って、一日中、海が逆巻き、波立つのを眺めています。いつか海霧の中からあなたが立ちあらわれてこないかと思いながら。いつか、あなたは、もっと東の方においでになりませんか——中国へ——マレー海峡へ——ビルマへ。ラングーンなどカルカッタから石を放り投げるほどの距離にすぎないではありませんか。空しい、空しい夢！でも、なんと甘美な夢か。

こうした海への思いは、五浦に戻ってからの天心の手紙にはくりかえしあらわれるものです。天心は、小船に乗った自分を港(バネルジー夫人)にたどり着かせてくれる風が吹かないものかと願う詩を書いたり、ふたりの精霊が太平洋の真ん中で出会う様を夢想する

手紙を書いたりもしています。五浦で太平洋の大海原を前にして、天心は、この海こそが、国境とか国際情勢とかの人為的な障壁を越えて直接的な精神の交流を可能にし、まさにアジアの一体性を実現する自然の場であることを実感したのでしょう。五浦は決してアクセスのよい場所ではありませんが、実際に行ってみると、東京などにいるよりもむしろ、インドやアメリカとダイレクトにコミュニケーションできるという彼が得た感覚を、いまでも追体験することができます。

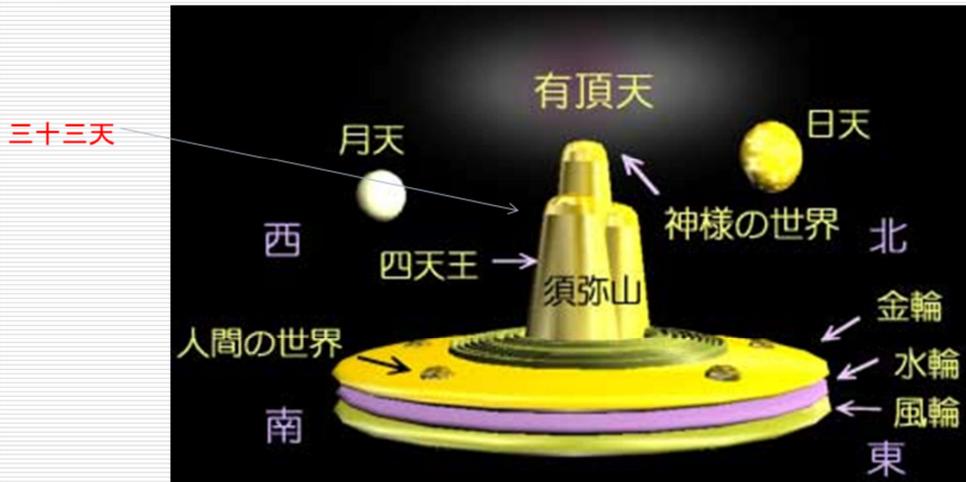
1913年8月、いよいよ天心に最期の時が近づいてきました。そのとき五浦から天心が送った手紙には、「くりかえし、くりかえしペンをとりあげましたが、驚くことに、何も書くべきことはありません」という一行に始まる、死に直面して茫然としているような思いがつつられています。その十数日後、天心は家族に付き添われて新潟県赤倉の山荘に移ります。そして、その病床から最後の手紙をバネルジー夫人に書き送りました。ここで初めて、天心はそれまで隠してきた病状を率直に打ち明けたうえで、死を受け入れた自分のいまの思いを次のように記すのです。

これまであんなに頑健だった私が、やっと、生きることの喜びを味わい始めたその時に、こうして病に倒れねばならないというのは、なんと奇妙なめぐりあわせでしょう。きっと、若い時に、野蛮な無茶ばかりしてきた罰があたったのでしょう。しかし、私は宇宙と全くうまくやっており、宇宙からこの頃与えられるものに対して感謝、そう、大変感謝しています。

私は本当に満足しており、暴れだしたいくらい幸せです。この部屋まで入り込んできて、枕のまわりで渦巻いている雲に向かって笑いかけるほどです。

8月24日、天心は腎臓病に心臓病を併発、29日、さらに尿毒症をも発して重体に陥ります。急をきいて東京から弟由三郎、弟子の横山大観、下村観山らが駆けつけましたが、そのまま、9月2日早朝、天心は五十年の生涯を閉じました。翌日、家族や弟子たちに護られて東京に戻る遺骸をおさめた棺は、最後は花こそが私たちとともにあるとした天心の言葉をなぞるように、赤倉の山に咲き乱れる秋の野花で覆われていたと言います。

## 須弥山のイメージ(やさしい仏教入門より)



24

岡倉天心がブリヤンダーバタデーヴィーにあてた最後の書簡の中に、「わたしは完全に宇宙と仲良くやっております」といい「ここは私の田舎の住居の一つで、死火山である妙高山の頂上にあります」と言っています。

唎利天は神様の名前ではなく、数ある天界のひとつです。欲界の人間に近い方から二番目の世界です。天界の全体像は[こちら](#)をご覧ください。

唎利天には33の城(天)があるので三十三天とも呼ばれます。唎利天は[サンスクリット語](#)のトゥラーヤストウリンシャの[音写](#)で三十三天はその訳です。

唎利天は[須弥山](#)の頂上にあります。人間は須弥山の南方のふもとにある閻浮提えんぶだいと呼ばれる島に住んでいて、唎利天はその上方、8万由旬のところにあります。

## 冬の妙高山

---



---

25

妙高山(みょうこうさん)は、[新潟県妙高市](#)にある標高2,454mの[成層火山](#)で、その中では最高峰。

[黒姫山](#)、[飯縄山](#)、[斑尾山](#)、[新潟焼山](#)と共に妙高火山群をなし

山体の基盤

北信五岳(ほくしんごがく)は、[妙高山](#)、[斑尾山](#)、[黒姫山](#)、[戸隠山](#)、[飯縄山](#)の5つの山の総称である。

## 夏の妙高山

---



---

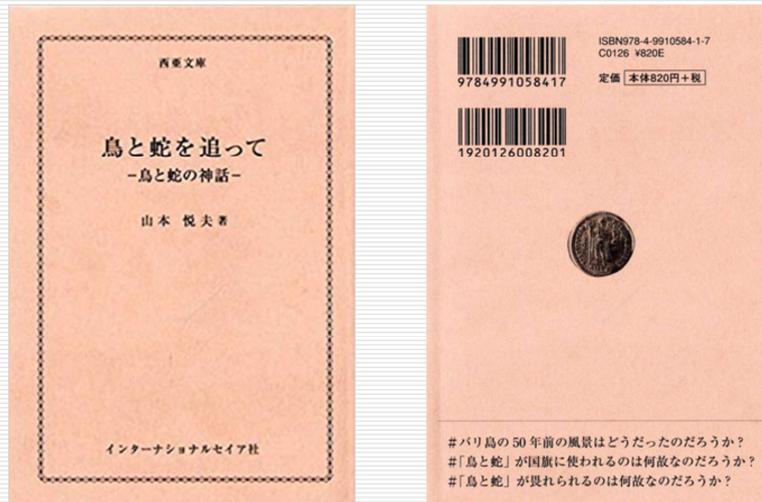
26

五浦は美術絵画という面から眺めると重要な土地でしたが、精神的な面からみると、妙高の方がずっとインドと精神世界と深く強く結びついております。天心は、五浦を西欧文明にならって選択しましたが、妙高を東洋文明、日本文明の中心の地である、と考えていたのです。

それ故に、天心はこの地に日本美術院を移したかったのです。東京から遠いという理由で、弟子たちに反対されてこれは実現しませんでした。私たちアジア文化造形学会は、岡倉天心が死に場所として選んだこの妙高の赤倉の地を天心の意をくんでアジア文化の発信の地としたいと願っております。天心の別荘から妙高山が遠く眺められます。

赤倉には、岡倉天心の別荘、六角堂が「今でも残っております。冬はスキー場も多い温泉地です。昭和天皇のお妃香「淳皇后の実家久邇宮家の別荘もここにありました。由緒のある 温泉地です。コロナで旅行客の減っている今の時期に赤倉の地にお出でになっていただければよい静養になると思います。是非お訪ねください。

# 『鳥と蛇の神話』



27

妙高山、須弥山、メール山についてご理解を深めていただくために私の書いた本があります。現在はアマゾンでのみ販売をいたしておりますが、ここに何冊か持ってまいりました。500円で販売をいたしますので、お買い上げいただければ有難く存じます。

ご清聴ありがとうございました

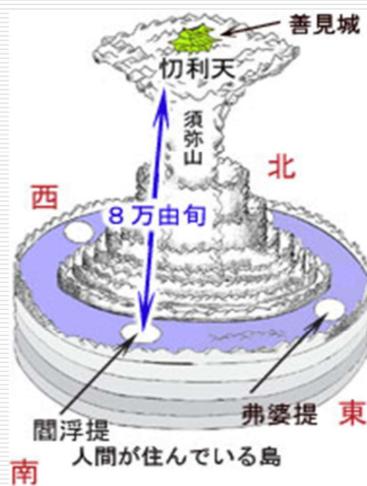
---

アジア文化造形学会 会長  
環太平洋アジア交流会 理事

山本悦夫

## 須弥山のイメージ(やさしい仏教入門 より)

---

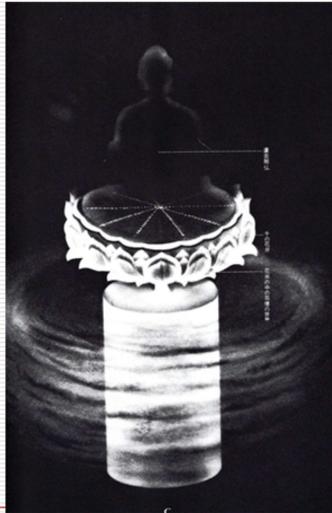


---

29

1由旬=7km

## 須弥山のイメージ(アジアの宇宙観より)



30

蘆舎那佛 毘盧遮那仏(びるしゃなぶつ、Vairocana<sup>[1]</sup>)は、[大乘仏教](#)における**仏**の1つ。[華嚴経](#)において中心的な存在として扱われる尊格である<sup>[2]</sup>。[密教](#)においては[大日如来](#)と同一視される<sup>[2][1]</sup>。

**毘盧遮那**とは[サンスクリット語](#)のVairocana「[ヴァイローチャナ](#)」の音訳で「光明遍照」(こうみょうへんじょう)を意味する。「**毘盧舎那仏**」とも表記される。略して**盧遮那仏**(るしゃなぶつ)、**遮那仏**(しゃなぶつ)とも表される。

史実の人物としての[ゴータマ・シッダールタ](#)を超えた宇宙仏(**法身仏**)。宇宙の**真理**を全ての人に照らし、**悟り**に導く仏。毘盧遮那仏については、『[華嚴経](#)』に詳しく説かれている。

## 飯綱大権現（戸隠民俗館蔵）



31

飯縄権現は、天狗形で白狐に乗った姿で表される。飯縄権現の本地仏は地蔵菩薩とされ、密教とも結びつき呪術としての「飯縄法」が公家や武家の間にも広まった。戦国時代には武将達に受け入れられ、川中島の戦いで有名な越後の上杉謙信や甲斐の武田信玄、或いは相模、武蔵の後北条の武将達のなかに信仰が広まっていきました。八王子城主北条氏照も、武田軍との戦いの中で馬上より振り返り、高尾山に鎮座する飯縄大権現に武運を祈ったとも伝えられています。

高尾山薬王院の御本尊であるこの飯縄大権現は、先ほども触れましたように不動明王を仮の姿として衆生を救済する徳を持った仏神といえますが、この姿を見ると驚くのは、不動明王のほかに、歓喜天、迦楼羅天、荼枳尼天、宇賀神(弁財天)の五相合体の姿をしています。

向背に火焰を負い、左右の御手に剣と索とを持てるは「不動明王」の御本誓を現し、悪魔を退治し、慈悲の智慧を以て種々の煩惱病苦を焼き尽くすものです。不動明王は、密教の根本尊である大日如来の化身、或いはその内証(内心の決意)を現したものであると見なされています。お不動さんの名で親しまれ、大日大聖不動明王(だいにちだいしょうふうどうみょうおう)、無動明王、無動尊、不動尊などとも呼ばれます。サンスクリットではAcalanatha(アチャラナータ;古代インドではシヴァ神の異名)と言いますが、「アチャラ」は「動かない」、「ナータ」は「守護者」を意味し、全体としては「不動の守護者」の意味です。

衆生に富貴を授け疫病を除き夫婦和合の徳を施す心を持つ「歓喜天」の心を抱きて求める所の利益を施します。歓喜天は、象頭人身で、インドではガネーシャと呼ばれ、福神で御利益は大きいですが、大変厳格な神なので、おろそかに祀るとかえって祟りをなすと言

われています。別名、大聖歡喜天(だいしょうかんぎてん)、大聖歡喜自在天(だいしょうかんぎじざいてん)、聖天(しょうてん)。

鷗啄と羽翼ある鳥の姿は自在に空を舞い衆生救済を施す「迦楼羅天(カルラ天)」の飛行自在の徳を表します。藥魯拏(がるだ)とも表記します。インドのガルーダが仏教に取り入れられ、仏法の守護神となったもので、別名、金翅鳥(こんじちょう)。

四つは白狐に乗って先を見通す力を授ける「荼枳尼天(ダキニ天)」の福を授く。別名、辰狐王菩薩(しんこおうぼさつ)。本来は人間の肝や心臓を食らう夜叉であったが、大黒天によって改心させられ、以後は死んだ人間の心臓のみを食らうようになり、福をもたらす神となった。人間の死を六ヶ月前に予測する事ができるが、命を奪うほどの力は無い。

白蛇を頂くは五穀豊穰、商売繁盛、福寿円満を授ける「宇賀神」の宝珠を、弁財天の愛嬌を与え給います。宇賀神の名は日本神話に登場する宇迦之御魂神(うかのみたま)に由来するものと考えられ、元々は宇迦之御魂神と同様の穀霊神・福神として民間で信仰されていた神であった。宇賀弁才天ともいう。

高尾山は寺院ですが、飯縄権現を祀り、修験たちの活動により、高尾山信仰は庶民にも広まっていくのでした。このため山上に行くと、飯縄権現堂(本社)と薬王院真喜寺(本堂)があるわけです。

飯縄権現堂は華麗さにおいては山内一と言っても過言ではありません。拝殿、幣殿、本殿が一体となった権現造りで壁面に施されている見事な彩色彫刻は、規模では及ばないものの日光の東照宮に比べても見劣りしません。昭和27年に東京都の有形文化財に指定されています。

本殿にはご本尊の飯縄大権現が安置されていますが、秘仏とされており開帳されていません。飯縄大権現堂正面両脇には大天狗、小天狗、さらに手前の山腹斜面には明治42年(1909)に建てられた三十六童子像が、それぞれ御本尊飯縄大権現の鎮座する聖域を形作っている。